

シンポジウム I：臨床検査技師教育における修学支援について：多様な学生への支援

3. 元当事者の視点から

原 口 彩央里 *

[キーワード] 聴覚障害当事者、臨床検査技師、修学支援、合理的配慮

はじめに

私は先天性両耳感音性難聴者です。聴力は両耳ともに 100dB で、補聴器を使用しても“音”は微かに聞こえますが、“言葉”としての認識はできません。そのため、身体障害者障害者手帳は、難聴では最も重い 2 級の交付を受けています。

現在、日常生活におけるコミュニケーションツールは主に口話法(話している相手の唇の動きを読み取り会話を行う方法)で行い、重要事項などの確認には筆談を併用しています。

私の聴覚障害は、寝ている私の耳元で母が目覚まし時計のアラームを大きな音で鳴らしても、私が起きなかったことにより発見されました。私が

1 歳 3 ヶ月の時でした。母は私の聴覚に障害があると分かったと、親として大変ショックを受け立ち直るのに時間がかかったけれど、「何とかして娘を助けてあげたい」と言う気持ちが芽生えたと、当時を振り返り語ってくれました。母の私へのこの思いは、“会話ができるようにしてあげたい”という強い決意に変わっていったそうです。それから、母が手作りしてくれた 20 種類以上の日記やカード(写真 1a、1b)を使用した、口話法の厳しい訓練が母と二人で始まりました。今思い返しても、とても苦しく、辛い日々でした。しかし、今、私が話すことができる音の世界に居るのは、幼い頃のこの訓練のお蔭であり、母に感謝する気持ちでいっぱいです。



写真 1a 母手作りのカード

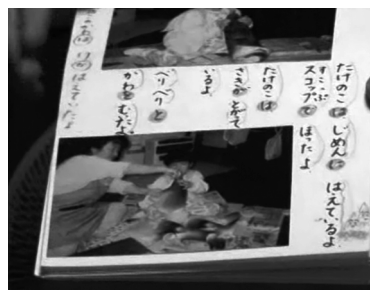


写真 1b 助詞を意識して使うように工夫されたカード

* 株式会社 臨床宮崎 dofxu19330@yahoo.co.jp

口話法をマスターした私は、小・中学校の義務教育と高等学校は地元の公立学校普通学級で学びました。授業中、先生が黒板に書きながら話をす
る際には口の動きが見えないため、小学校4年生から市から派遣された教育アシスタントによる要約筆記のサポートを受けました。

熊本保健科学大学における修学支援

1. 入学試験から入学式までの支援

大学進学を前にして進路を模索していた私は、看護師である兄や臨床検査技師として病院の検査室で勤務していらっしゃる友人のお姉さまから、「聴覚に障害があっても、臨床検査技師の資格を得て働ける部門があるよ」と教えていただきました。それまで、好きな生物の授業や実験を活かした分野に進みたいと漫然と考えていましたが、臨床検査技師の仕事内容を詳しく調べてみた結果、臨床検査技師は、聴覚に障害があるがゆえに私の一番の個性ともいえる“視覚による情報収集力”を生かせる職業の一つであると考えることができ、この道を目指すことにしました。

そこで、九州内のいくつかの臨床検査技師養成施設に聴覚障害者の受け入れを打診したのち、地元を離れ隣県に所在する熊本保健科学大学保健科学部医学検査学科を受験することにしました。受験は一般推薦枠に応募し、筆記試験と面接試験を受けました。筆記試験時は、座席配慮のほか、試験開始前を含む口頭による説明を、文書で指差し確認する配慮を希望しました。一方、大学側からは面接試験に集団討議が含まれていることから、別室で個人面接に代える措置がなされました。合格発表があった後には面談を通して、カリキュラムがタイトであること、進級要件も厳しく4年間で学業を終えることは容易ではないこと、また、希望する修学支援についても、大学側が聴覚障害学生への支援経験がなく期待通りに実施することが難しいかもしれないことなど、受け入れ態勢についても説明を受けました。一人暮らしを始めることも含めて、両親と相談を重ねたのちに大学側に入学意志を伝えました。その後、入学する前に教職員の皆様の前で『試験を受ける立場から』と題

して、これまでの私の紹介とこれからの私への支援に関するスピーチを行う場を設けていただくこともできました(写真 2a)。

入学式では、学長が式辞の中で同級生となる新入生に対して、私の紹介を行っていただいたほか、式典もパソコンの文字入力を利用してその場の音情報を伝えるパソコンノートテイク(以下、PC ノートテイク)による情報保障(その場を共有する全ての人が同質・同量の情報を得て、場面に参加できるようにするための活動)を提供していただきました。

2. 講義時の支援

すべての講義および学内行事において、PC ノートテイクによる修学支援を受けることができました(写真 2b)。そのため、座席は支援者が聞き取りやすい前方の位置に設定する配慮をお願いし、同級生の理解と協力も得ることができました。また、ゼミ形式の授業においては、私も討議に参加しやすいように、ホワイトボードのようにマーカーで書いたり、消したりできる特殊教材(ミーティングシート)を準備していただき、孤立感を軽減することができました。

3. 学内実習時の支援

実習時にも実習室座席やグループ編成時の配慮を受け、情報保障はPC ノートテイクに代わる手書の要約筆記で情報保障を受けました。また、動画を利用した実習操作の手法説明時には、画面に字幕をつける配慮により、映像と字幕を同一画面で見られることからリアルタイムに内容を理解できました。

さらに、顕微鏡を使用する実習においては、モニター付き顕微鏡(写真 3a)を購入していただき、モニターに映し出された顕微鏡下の標本を指差しながら先生方の唇の動きを読み取り、標本画像の特徴等を確認できました。

4. 臨地実習時の支援

地元の臨地実習(3年次後期の11月～翌年1月の期間内に47日間(7単位実施)施設における情報保障は、検査業務のためPC ノートテイクによる支援が難しいことから、同じ施設で実習を行う同級生2名が情報保障の手助けを行ってくれ



写真 2a 入学前の教職員へのメッセージ



写真 2b 3 年次臨地実習認定式時の PC ノートテイクによる情報保障

ました(写真 3b)。また、技師の方々もマスクを外して口元を見せて説明してくださいました。そのほか、反応時間の厳守が必要な検査では振動付きタイマーを、筆談のためには iPad を、大学側が支援機器として準備していただく配慮を受けました。

一方、大学側とは、障害学生支援委員会委員かつ実習施設担当教員でもあるスモールグループ担任と、毎日電子メールを介して連絡を行い、日々の実習状況をその場その場で共有して、問題が生じた際はすぐに対処していただきました。これらの支援と配慮を受け、周りの方々との関係を築きながら一歩ずつ前進することができました。

5. 国家試験受験から就職活動までの支援

国家試験受験にあたっては、厚生労働省への受験時の配慮申請を障害学生支援室に依頼しました。配慮事項は、前方座席の提供や注意事項の書面伝達のほか、試験時間中の補聴器持ち込みと使用の許可、試験開始および終了合図の書面伝達、さらに緊急事項発生時の文書による伝達でした。試験当日には特例措置が認められて申請事項すべ

てに対応がなされたことにより、試験による精神的不安を軽減して試験問題に集中することができました。

就職活動は、少々大変でした。私が病院の検査室勤務を切望したために、聴覚障害者を受け入れてくださる施設を探すことが難しく、地元のハローワークや大学側と関係の深い医療法人等の紹介を受けました。そして、どうにか卒業年度内に、地元の医療法人へ入職しました。その後、今年(2019 年)4 月に退職して、5 月から現在の職場に勤務しています。転職時も大学側にいろいろな施設へ求人を探していただきましたが、障害者枠での臨床検査技師としての求人において、障害を理解してくださる施設を見つけることがかなり難しく、最終的に地元ハローワークの紹介により、『株式会社 臨床宮崎』に一般枠で応募して、採用していただくことができました。

おわりに

熊本保健科学大学においては、聴覚障害者の受け入れは私が初めてということで、手探り状態の

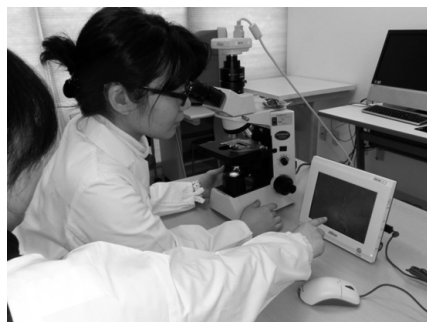
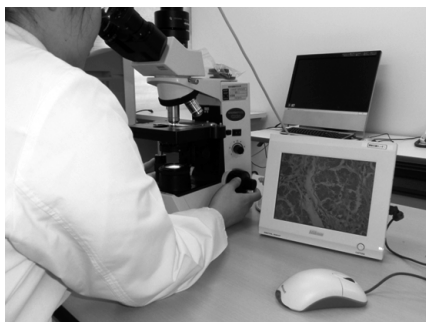


写真 3a モニター付顕微鏡

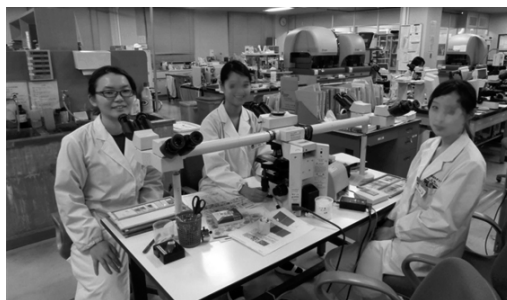


写真 3b 臨地実習施設にて

支援であると入学時に説明を受けましたが、その場面ごとに当事者である私に寄り添った支援を提供していただけたことで、入学当初に苦しんだ専門用語の理解もなんとか乗り越え、5年をかけて臨床検査技師養成課程を修了しました。また、卒業と同時に臨床検査技師免許を取得することができました。

もしも、これまでの支援がなかったら……。先生方の口元を長時間、注視し続けることにはかなりの労力を必要し、口話法のみで専門的な授業を受けることは厳しく、授業そのものを楽しいものとは思えなかっただろうと感じています。実際に、大学においてノートテイク等の支援を受けられなかった聴覚障害者は、授業内容の醍醐味に触れることなく、挫折感のみを味わい自主退学を選ぶ人もいと聞き及んでいます。

現在、私は臨床検査技師として『株式会社 臨床宮崎』（検査センター）における検体検査業務に携わり、充実した日々を送っています。そして、目標としている病理検査や念願の細胞検査士の資格

取得にむけて、自己研鑽を積むために技師会等の研修会にも積極的に参加しています。研修会では講師の先生の協力を得て、2019年2月にGoogleが無料提供を開始した、Android版音声文字変換アプリケーションLive Transcribeをダウンロードしたスマートフォンに、ワイヤレスマイクを接続して使用しています(写真4)。これを使用することで、講演内容の80%以上を文字で確認することができています。現在の“AI・人工知能”の進歩は目覚ましいものがあり、今後ますます障害者への支援技術は進むものと期待しています。

最後に、障害者教育に関わるすべての教職員の皆様へのお願いとして、障害者がもつ障害によって、「これができないから……。」「あれができないから……。」と言って、先回りしてその人の“伸びしろ”を無くしてしまわないでください。その個々人がもっている“能力”の可能性に目を向けて、支援の力を貸してください。

私はこれからも、聴覚障害をマイナスと捉えずに自分の個性の一部と考え、聴覚に障害があるが

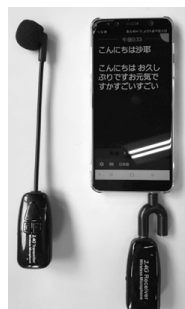


写真4 スマートフォンにワイヤレスマイクを接続した情報保障

ゆえに、自然に視覚から入る情報を素早くキャッチし分析する力をさらに磨き、臨床検査技師として医療の一翼を担っていきたいと考えています。

謝 辞

今回、発表の場をいただきました日本臨床検査学教育協議会 奥村伸生理事長および第14回日本臨床検査学教育学会学術大会 古閑公治大会長、ならびに熊本保健科学大学保健科学部医学検査学科在学中に修学支援に携わっていただきましたすべての教職員と学生の皆様、さらに情報保障を担当していただきましたパソコン文字通訳グループ“らん”の皆様方に深く感謝いたします。

文 献

1) 嶋田かをる, 佐々木千穂, 岡部由紀子, 廣瀬英治, 向井良

人, 河瀬晴夫, その他. 聴覚に障害のある学生への教育支援 第1報—入学前から第1セメスターまで—. 保健科学研究誌 2012; 9: 63-9.

2) 嶋田かをる, 廣瀬英治, 北野正文, 佐々木千穂, 岡部由紀子, 河瀬晴夫, その他. 医学系学部における聴覚に障害のある学生への教育支援第2報—障害学生支援室とFD活動—(抄). 第7回日本臨床検査学教育学会学術大会抄録集. 名古屋: 日本臨床検査学教育協議会事務局 2012: 97.

3) 嶋田かをる, 杉内博幸, 廣瀬英治, 野中喜久, 北野正文, 石丸靖二. 障がいのある学生への修学支援—『障害学生支援室』における臨地実習支援の取り組み—(抄). 第9回日本臨床検査学教育学会学術大会抄録集. 東京: 日本臨床検査学教育協議会事務局 2014: 68.

4) 嶋田かをる, 杉内博幸, 廣瀬英治, 坂元美里, 佐藤智浩, 河瀬晴夫, その他. 修学上特別な配慮を必要とする学生への国家試験受験支援. 熊本保健科学大学研究誌 2018; 15: 83-8.